偉人 坪内逍遙 ⑱

逍遙逝く

昭和10年、かぜから気管支カタルを併発した逍遙は再起不能を自覚し、後輩に『新修シェークスピヤ全集』の『オセロー』と『研究栞』の修正整理や、葬儀の準備を依頼しました。そして同年2月28日、最愛の地・熱海で眠るようにこの世を去りました。墓地は逍遙の希望で、熱海の双柿舎に近い海蔵寺境内に作られました。

熱海は、晩年夫人とともに静かに過ごした場所です。「海と山と田園とを兼ね備へ、都会的設備と田舎の趣味とを両立せしめている」（熱海に関する追憶）と述べています。

逍遙の死は新聞で大きく取り上げられ、「博士の演劇文学に残した足跡は余りに大きく、我国文学史上の一の高峰的存在であった」（昭和10年3月1日東京朝日新聞・夕刊）とたたえられました。

▲晩年の逍遙（右は妻）